

I 学校教育目標 「すくすく」 しっかりと根を張り、幹を太くし、枝を広げた木のように育つ子どもの育成						
II 前年度に残された課題	III 本年度の重点課題	IV 来年度に残された課題				
<p>○自ら学び自ら考える子の育成 ①書くことを通して物事をじっくり考え、自分の考えをまとめたり論理的に結論を導き出しやすくなる子が苦手な子どもが多い。 ②「家庭教育・家庭の日」が形骸化している。</p> <p>○他人を思いやる温かい心をもつ子の育成 ③自分の身勝手な行動に歯止めがかからない子、他人の思いを受け止めて言葉が発したり優しく温かく接したりすることができない子が多い。</p> <p>○健康でたくましい子の育成 ④運動の二極化が進んでおり、筋力や投能力、体幹が弱い子どもを中心に、けがが多い。</p> <p>○学校評価の活用 ⑤調査やアンケートを活用した授業改善や学校行事等の改善、児童会活動の活性化が不十分である。</p>	<p>○「自ら学び自ら考える子の育成」のために ①大型ディスプレイや大型テレビを活用した授業を行い、授業における学習指導法の改善を推進する。 ②書いたことをもとにして話し合い、子ども一人一人の表現力の充実に努めるとともに、集団としての言語活動を活発にする。 ③毎月第3日曜日の「家庭教育、家庭の日」に子どもが家族で読書活動を楽しめるよう、働きかける。 ○「他人を思いやる温かい心をもつ子の育成」のために ④道徳実践力を高め、自分の生き方や今までの考え方をゆきぶるような道徳の授業について研究を深める。 ⑤児童会活動や学級活動を活性化させ、子どもたちが将来における自己実現を図るため、行動力や社会的資質を高める指導や支援を行う。 ○健康でたくましい子の育成 ⑥業間や業前の体育活動に子どもたちが進んで取り組めるような環境を作る。 ○学校評価の活用 ⑦評価活動を通してコミュニケーションにより、保護者や地域住民と学校が互いに理解を深める。 ○その他 ⑧「教職員がいきいきと子どもと向き合う時間創造プログラム」の策定に伴い、教職員一人一人が自ら服務や勤務の管理を行う。</p>	<p>○「自ら学び自ら考える子の育成」のために ・自分の考えを持ち、それを抵抗感なく文章で綴ることができる子どもを育成する。 ・子どもの思考力を高める読書活動を推進する。 ○「他人を思いやる温かい心をもつ子の育成」のために ・周りの人を温かく元気にする挨拶ができる子どもを育てる。 ・大勢でいるときも一人の時の善悪の判断がぶれない児童を育てるための生徒指導や学習指導の実践に力を入れる。 ○健康でたくましい子の育成 ・子どもたちが喜んで外遊びに興じるよう、学級活動を工夫する。 ○学校評価の活用 ・学校運営協議会を通し、保護者や地域住民のニーズを把握し、その思いを学校運営に反映させる。 ○その他 ・「教職員がいきいきと子どもと向き合う時間創造プログラム」の策定に伴い、こぼれの教室を含む教職員一人一人が自らの服務や勤務の管理を行う。</p>				
<p>「1」(重点課題番号)</p>	<p>[2]具体的達成目標と評価指標</p> <p>具体的に、何を、いつまでに、どの水準まで、数値化</p> <p>公表日 月 日</p> <p>□ ホームページ □ 文書配布 □ 説明会実施 □ その他</p>	<p>[3]自己評価</p> <p>中間評価</p> <p>評価日 7月8日 公表日 7月17日</p> <p>□ ホームページ □ 文書配布 □ 説明会実施 □ その他</p>	<p>[4]外部アンケートの分析</p> <p>児童生徒アンケート 実施日 6月26日、11月11日 公表日 7月17日、12月1日</p> <p>保護者アンケート 実施日 11月15日 公表日 12月12日</p> <p>□ ホームページ □ 文書配布 □ 説明会実施 □ その他</p>	<p>[5]自己評価</p> <p>最終評価(成果と課題) 評価日 12月10日 公表日 1月9日</p> <p>課題の改善策等</p> <p>□ ホームページ □ 文書配布 □ 説明会実施 □ その他</p>	<p>[6]学校関係者評価</p> <p>評価 7人 10月28日 3月3日 公表 3月15日</p> <p>□ ホームページ □ 文書配布 □ 説明会実施 □ その他</p>	
①	<p>大型ディスプレイや大型テレビ、書画カメラなどの施設設備を十分活用し、授業記録を画面でまとめる。</p>	<p>・情報教育機器を使った授業を参観で保護者に公開する学年もあり、69.0%の教員が肯定的な回答をした。各教室に1台のパソコンが市から配備されたことや、学年で1台の書画カメラを学校が計画購入したことで、教職員のICTを活用した授業実施率は昨年度より高くなっている。</p>	<p>・92.1%の児童が「様々なICT機器を使って、先生はわかりやすい授業をしてくれた」と答えている。 ・低学年では国語や算数の教科書を黒板に写して書き込みをしながら授業を進めていた。高学年の児童はインターネットを活用して月の動きや満ち欠けを学習したり、条件を整備した実験や観察の結果を見て、理解を深めていた。環境学習や平和学習のまとめとしてパワーポイントを活用した情報の発信を行い、児童は達成感を得たようである。</p>	<p>・「お子さんは、学校のICT施設や設備を活用した先生の授業をよくわかっているようですか」の質問に肯定的な回答をしたのは63.3%であった。 ・「ICTに関しては学校が特に進んでいるとは思えない。とりえず使用しているように思う。」という保護者からの厳しい意見がある。</p>	<p>・84.6%の教員がICTを活用した授業記録をまとめることができたことと答えている。高学年では理科や社会で、低学年は国語や算数の授業での活用率が高い。 ・電子黒板やデジタル教科書がない教室環境で、授業中の活用頻度が最も高かったICT機器は書画カメラであった。しかし、書画カメラは各学年1台ずつしかない。また、無線LANでインターネットに接続できるノートパソコンも各学年に1台しかない、各学級に1台ずつ配置することを教員が切に望んでいる。</p>	<p>・3月に全教員が活用事例の書面報告をし、学校全体で共有できるフォルダに保管する。 ・来年度は備品として書画カメラを通常学級2学級に1台設置することができるよう、予算を検討する。</p> <p>・タブレット端末が一人一台高学年児童に配布されるようだが、育友会としても周辺機器購入を援助したいとのことである。 ・子どもは、学校でパソコンを使った授業があったことを伝えてくれる。また、「パソコン使わせて」と家で言うことがある。子どものスキルは大人よりも高く、スキル習得のスピードも速い。当たり前にICTを使う授業スタイルを目指して、教員も研鑽を積んでほしい。</p>
②	<p>朝の15分間の「はげみ学習」では、新聞によるまとめ学習や振り返り作文で子どもの書く力を高めるとともに、週1回程度の作文の家庭学習を行い、指導する。</p>	<p>・72.0%の教職員が「できた、概ねできた」と答えている。児童アンケートで「日記や作文を書くことが楽しい」と回答した児童は72.0%で、本校児童は文章を綴ることにより抵抗がないと考えていたが、全国学力・学習状況調査の「書く」領域では、無回答率が30%を超えた設問もあり、本校児童には、構成を考えながら文章を書いたり、自分の意見を理由をつけて書いたりすることが苦手な子どもが多くなっているのではないかと分析した。そこで、2学期から100マス作文を取り入れて「書く」学習に取り組んでいる。</p>	<p>・朝のはげみの時間が確保できていない。また、小学校6年間を見通した作文の指導が系統立ててできていないため、「文を書くことが楽しい」と思っている児童は、前期アンケート72.0%から、後期68.4%に低下した。 ・週1度の作文の家庭学習は「日記を書くこと」にしている学級が多い。しかし、日記は比較的自由に書けるので子どもにとって抵抗感がない課題である。それよりも、結論と理由を書いた文章を書くことや、起承転結を考えながら書くことについての指導が肝心なことがアンケートから伺えた。</p>	<p>・「お子さんが家で本を読む姿を見かけるようになりましたか」という質問に、72.0%の保護者が「そう思う、おおむねそう思う」と答えている。同じ質問に対して昨年度は54.0%しか「そう思う、おおむねそう思う」と答えていないので、家庭での読書が定着してきたように思われる。</p>	<p>・研修部や教務部が「書く」力をつける取り組みとして100マス作文を紹介した。これにより、ほとんどの学年で2学期から100マス作文に取り組み、83.3%の教員が「できた、概ねできた」としている。 ・「書くことがわからず、すぐに教員に「○○について書いてもいいですか」「△△について書くのはいいんですか」と聞く児童が高学年に意外と多い。作文を綴ることに自信がないためだと思われる。日記は書けるが作文は書けないという児童はこのような状況に陥りやすいので、100文字で何を書くのかを明確にする指導が必要である。 ・朝のはげみ学習の時間(15分間)が確保されていない。朝の会の延長、学級会活動、行事の事前学習、1時間目の授業準備や教室移動の時間になっている。</p>	<p>・業前の時間割を見直す。どの学級も読書時間は時間割通り確保できているので、読書時間を15分にし、年間35時間の国語の学習時間に加える。本を通して児童がすばらしい文章に出会い、語彙を増やし、文字や文章を読むことで、子どもの書く力を伸ばす。 ・100マス作文は来年度も取り組む。</p>
③	<p>「家庭教育・家庭の日」に、合わせて、学校図書館司書や図書館教育担当教員の助言や支援を受けながら、「読書週間」や「読書デー」などの取組を行い、児童が家庭で10分以上本を読むことを目指す。</p>	<p>・70.8%の教職員が「できた、概ねできた」と回答している。低・中学年で音読を家の人に聞いてもらう家庭学習を行い、家の人が子どもの読書活動に興味を持てるようにした。1学期末の個人懇談期間中は図書室を保護者に開放し、夏休み中に子どもに読ませたい本を借りる取組を学校図書館司書と共にし、約40人の保護者が利用した。</p>	<p>・「家で10分間ほど本を読む時間を作っていますか」の質問に、72.0%の児童が肯定的な回答をしている。前期は65.8%だったので、わずかながら指導の成果が表れてきたようだ。 ・絵や図鑑ばかり好んで見る子、学級文庫や学年文庫の選書だけで朝の読書の時間が終わってしまう子もいる。</p>	<p>・「お子さんが家で本を読む姿を見かけるようになりましたか」という質問に、72.0%の保護者が「そう思う、おおむねそう思う」と答えている。同じ質問に対して昨年度は54.0%しか「そう思う、おおむねそう思う」と答えていないので、家庭での読書が定着してきたように思われる。</p>	<p>・中間期は70.8%の教員が「できた、概ねできた」と答えたにもかかわらず、最終評価では52.2%の低位となった。これは、学校として「家庭教育・家庭の日」の周知ができていなかったためではないかと思われる。 ・家庭学習の課題として家庭での読書を勧めることは、学級担任であれば定期的に行う。本校は図書ボランティアに読書活動を随分支援いただいているが、それに甘えず、教員も意識的に子どもに本への関心を高める指導を考えなければいけない。</p>	<p>・「家庭教育・家庭の日」を年間行事予定表、学年だより、教師用の月行事予定表に記入し、教師も保護者も家庭教育への意識を高める。 ・保護者への図書室開放を来年度も継続させる。 ・学級担任は、読み聞かせをしたり、本を紹介したり、図書室で本を借りる時間を確保したりといった地道な取り組みを続ける。</p>
④	<p>「今度は『こうしよう』、もし同じことがあれば『こうする』と気づかせる『心に響く道徳授業』を行い、『道徳の授業に熱中できた』と思う児童の割合を7割以上とする。(専科等:子どもの行動により変化をもたらす指導や支援、声掛けをする。)</p>	<p>・道徳科で勉強したことが実際の子どもの言動と乖離するようでは学習の効果があつたとは言えない。「同じようなことが自分の身に起きたらどうしよう」とか、「あの時はこうすればよかったなあ」と自分の過去の出来事を振り返る授業を「心に響く道徳授業」とし、授業研究を行ったが、「できた、概ねできた」と回答したのは72.4%の教職員であった。</p>	<p>・「心にグツときたり、ハッと気づかされたり、そんな道徳の授業でよかったか」という質問に対して、「そう思う、どちらかといえばそう思う」と回答した児童は、前期80.5%だったが、後期は95.7%となっている。1学期後半から2学期末にかけて多くの学年が授業公開を行ったが、それに向けて学年の担任が意見を交わし、教材研究を重ねたからだと思う。</p>	<p>・「道徳の学習などによって、お子さんの言動に良い変化が見られたと思えますか」という質問に、「そう思う、おおむねそう思う」と回答した保護者は64.8%だった。子ども自身が「道徳の学習で考えさせられた」としたのは95.7%であるのに対し、保護者は子どもたちの言動に変容を感じてはいない。しかし、学校での指導の効果は短期間で出現するものではないと思うので、長期的に子どもの様子を見ていきたい。</p>	<p>・子どもを授業に熱中させ、子どもの心に響く道徳授業ができたかという質問に、教員の92.3%が「できた、概ねできた」と答えている。これは中間評価よりも20ポイント近く上がった。これは、2学期に校内研修として道徳の授業を公開することが度々あり、授業公開する学級や学年はもちろんのこと、多くの教員が公開された授業を参考にして、招聘した講師や同僚の意見を聞き、授業力を上げていったためだと思われる。</p>	<p>・教員一人一人の授業力を上げるためには、相応な時間を要する。よって、校内で研修する機会を多く設定し、所属職員全員で取り組むシステムを作らなければならない。よって、来年も同じ研修テーマで道徳科の授業研究を続けることが必要であろう。</p>
⑤	<p>学校や学級をよくするための方策やルールを児童自らじっくり考えられるよう、月1度の学級会や年間10回の児童会代表委員会で話し合いの時間を確保する。</p>	<p>・全国学力・学習状況調査では65.0%の児童しか「話し合い活動ができた」と答えていない。にもかかわらず、教職員は83.3%が「話し合い活動ができた、概ねできた」と答えている。児童と教職員で20ポイントほどの大きな差があり、児童が本当に積極的に意見を交わし合い、友だちの意見を聞くことで自分の考えを確かに行うことができたのかを謙虚に考える必要がある。</p>	<p>・「いい学校、いい学級になるように話し合いをしましたか」という質問に、肯定的な回答をした児童の割合は、前期81.9%、後期80.3%だった。1年生や2年生は、先生が司会をして学級会をしているが、中学年や高学年は児童が司会者になって学級会を運営している。</p>	<p>・運動会という大きな学校行事は、児童に話し合う機会や時間を与えた。特に高学年は学級という枠組みではなく、委員会や分担した仕事の仲間と意見を交わす機会があり、自分とは違う考えを持つ友達と多く関わることができた。 ・92.3%の教員が「できた、概ねできた」と答えた。</p>	<p>・3学期は卒業式や修了式があり、卒業生への感謝の気持ちを伝えるため、また、クラス替えでお別れする友だちに哀惜の思いを伝えるための話し合いが行われる。段階を踏んで子どもたちは別れの気持ちを深めていくと思われるので、話し合う時間を十分確保する。</p>	<p>・子どもの意見を引き出すために、児童会活動に力を入れて取り組んだようである。委員会発案の、大縄大会、ゲーム大会等は、子どもたちは夢中になっていたようだ。話し合いが成立するには、まず自分の意見を持つこと、それから、自分の意見が自由に述べられる雰囲気があること、出された意見を聞いて解釈できること、さらに高みを目指すために建設的な意見を出せることが大切であろう。92.3%ができたことと答えているが、これからも取り組みを続けてほしい。</p>

⑥	休み時間に外で元気よく遊ぶ取組を各学級で毎週1回行い、広い運動場で楽しく体を動かす子どもを増やす。(委員会活動で業前や業間に体を動かす催し等を企画・運営する。)	B ・1学期の終わりは体育館で健康安全委員会が「クラス対抗雑巾がけリレー」を企画した。2学期のはじめは「学級対抗リレー」を運動場で行う予定であったが、雨や運動会準備と練習のため、一部の学年が実施したのみとなっている。中高学年女子が昼休みに運動場に出て遊ぶことが少ない状況である。	・「朝や中間休み、昼休みは運動場に出て元気に遊んでいるか」の質問に肯定的な回答をした児童は、前期73.7%と低い値だったが、後期は65.4%とさらに減った。大きな行事が立て続けにある2学期は、休み時間が行事の係活動に費やされることもあり、学級遊び(学級のみんなで一緒に遊ぶ)がなかなかできず、休み時間を校舎内で過ごす児童が多かった。	・「お子さんは放課後や休日も、元気に外遊びを楽しんでいますか」という質問に「そう思う、どちらかといえばそう思う」と回答した保護者は66.3%と比較的少なかった。 ・「本校は校区が広範囲なので、気の合う友達と遊びたいが、自宅から遠くて行けない。友達と交流できる場所を作ってほしい。」という保護者の声があった。	A ・学年ごと、クラスごとにドッジボール大会やリレー大会を行い、学級全員で外遊びをする機会を運動委員会が設けた。健康安全委員会は、体感を鍛えるゲームを体育館で休み時間に行った。このような定期的に計画したイベントがあれば運動する機会も増え、休み時間に子どもたちが外遊びに興じるきっかけになった。 ・「できた、概ねできた」と答えた教員は88.5%である。	・やりたい外遊びを学級等で話し合い、子どもたちのニーズに合わせた楽しい遊びに集団で取り組ませたい。学級での話し合いや委員会活動で出た意見をもとに、各担当がアイデアを出し、外遊びを推奨する取組を行う。	・昨年は休み時間に教室で折り紙をしていることが多かった子が、今年は運動場でドッジボールをしていると聞く。先生の言葉がけで、友だちと外で体を動かすことができるようになった。先生の果たす役割や影響は大きいので、今後も子どもたちと一緒に休み時間は外で過ごしていただけたら幸いである。 ・運動会後に休み時間のイベントを委員会を考え、遊ぶ機会を作ったことが、外遊びの推奨になったように感じる。
⑦	学力・学習状況調査、体力テスト、いじめアンケート、児童アンケート、保護者アンケート等の結果や学校関係者評価委員会の意見をふまえ、自分なりの手立てを示し、実践する。	B ・全国学力・学習状況調査の問題を全教員が夏休みに解いた。実際の問題を知り、正答率を知ることで、本校が抱える課題が何なのか、それを解決するための手立ては何かを学年ごとに話し合った。それを研修部がまとめ、その結果、100マス作文で「書く」力をつけていくことを全教員が確認した。	・「学校は教育方針や教育活動をわかりやすく伝え、御家庭と連携を図ろうとしていましたか」という質問に、83.4%の保護者が「そう思う、どちらかといえばそう思う」と回答している。各種の調査やアンケートの結果は学校だよりや学校ホームページで公開し、各学年の取組は学年だよりで伝えている。	A ・「できた、概ねできた」と回答した教員は中間期より16.5ポイント上昇して88.5%である。 ・学校の取組の成果は、学校だけでなく家庭や地域で見える子どもの姿に表れる。取組の成果は時間をかけて少しずつ蓄積し、目に見える形で表出するまでは時間がかかると感じる。学校評価委員会や育友会の声を聞きながら調整や修正をしなければならぬ。	・全国学力・学習状況調査、児童アンケート、保護者アンケート、自己評価は管理職と教務部で結果の分析や考察をするが、それぞれ、それ以外の教員にも話を聞きながら、児童や教職員の実態や様子から分析する。 ・夏休み中に全国学力・学習状況調査を教員が実際にやってみて、子どもたちのつまづきに気づく取組を合同で行う。	・外部からの意見等を聞きながら学校全体として教育活動を行っていたことは理解できる。しかし、教職員一人一人がどのような取組をしたかについては明確にわからない。 ・地域ぐるみの児童健全育成協議会や育友会の協力を得て、学校運営を検証することが大切である。	
⑧	すべての教職員が調和して学校教育活動に臨むため、提出期限や時間(クロックアウト時刻)を守る。	A ・書類や調査の提出期限が守れない教職員は減っている。また、クロックアウト時刻の19時には管理職が超過勤務中の教職員に声をかけて退出を促し、ほとんどの教職員が19時半までに退出している。保護者へも協力をお願いし、18時半には留守番電話設定にしている。			B ・88.5%の教員が「できた、概ねできた」と答えている。終業時刻については水曜日を18時にして「定時退勤日」に設定した。2学期からの取り組みであるが、保護者にも理解していただき、今のところ大きな問題は発生しておらず、順調に取組を進めている。平日はクロックアウト時刻を19時にし、毎日管理職が声をかけて退勤を促している。	・管理職が声をかけなくても、教職員一人一人が終業時刻を意識して仕事を行い、自ら仕事を辞めて帰宅準備ができるようにする。 ・提出物、提出書類の期限をまだ守れていない教員がいる。サイボウズなどを活用して提出忘れがないように促す。	・留守番電話対応で、学校運営に支障をきたしたことはなかったようだが、緊急事態時の対応方法については保護者に度々伝える必要がある。 ・働き方改革が進む世の中の動向を鑑み、教育現場も機敏に対応することが大切であろう。